○山男と米ケ森

昔、荒川の中央に聳えている山に、一人の山男が住んでいた。この山男は体こそ大きいが、一人前の力がなくその為他の山男達より離れて修業を続けていたが、残念なことにいくらたつても力がついてこなかつた。一人前の男になるには、巨石のなかに入つている石餅を食べなければならなかつたが、この山男は力が不足でその石を割ることができなかつた。

その頃村に米ケ森という相撲とりがいた。米ケ森は天下無敵と云われる程の力士であつたので、山男は米ケ森を利用して石を割ることを考えつき、米ケ森と力くらべをすることを申込んだ。この申込みは村中に知れわたり、村人はこの勝負を見るため、定められた日の朝からぞろぞろ麓に集つた。

やがて約束の時刻ともなり山男も米ケ森もあらわれた。山男はそばの大石をさして、「この大石を投げつけて割ることができた方を勝としよう。もし私が負けたらこの山をお前にあげよう、お前がわれなかつたら、村人の前にひざまづいて三度礼をしてあやまれ」といつた。米ケ森は、それは面白いというより早く、目よりも高く大石をさし上げ、そばの大岩めがけて投げつけた。流石に名力士だけあつて力も勝れ、大石はみごとザクリと二つに割れた。これを見ていた山男は風よりも早く大石のそばにかけより、中の石餅を両手にとつてムシャムシャとくつた。米ケ森も村人もただ茫然として見ているだけであつた。やがて食べ終わつた山男は、米ケ森の前に手をついて、山男の掟や石餅のことなどを物語り、力くらべといつてあざむいたことを許してほしいとあやまつた。米ケ森は心よくそれを許したので、山男は仲間に加わることが出きると、厚くお礼をのべて山奥へと消えさつた。山は約束通り米ケ森にゆずられたため、村人達は以後、この山を米ケ森と呼ぶようになつたという。山男は太平山（一一七〇・六メートル）へ帰つたのだといわれている。

（荒川）